

赤 心(せきしん)

～豊かな感性 確かな知性 あふれる意欲～

2021. 6. 30

「少年の主張」伊勢崎市大会から中部地区大会へ

6月25日(金)に宮郷公民館で、「少年の主張」伊勢崎市大会が行われました。伊勢崎市の各中学校から代表生徒が参加しました。赤堀中学校からは、3年生の町田麻衣さんが大会に参加しました。校内大会の発表に更に磨きをかけた素晴らしい発表でした。その結果、見事伊勢崎市の代表に選ばれて、8月7日(土)の中部地区大会に出場することになりました。町田麻衣さんの活躍にエールを送るとともに、発表内容を掲載します。

『母に伝えたい』

群馬県 伊勢崎市立赤堀中学校

三年 町田 麻衣

「ありがとう」「ごめん」あなたは、この二つの言葉を何回伝えたことがありますか。伝えたい人はいますか。私には感謝と謝罪を何千回でも何万回でも伝えたいと思う人がいます。

私は、三歳の頃から小学二年生まで滲出性中耳炎という病気にかかっていた。中耳炎とは、耳の鼓膜の奥にある中耳が炎症をおこすことです。聞いたことのある人や、中耳炎だったことのある人も多いかもかもしれませんが、私は普通よりかなり重い中耳炎でした。小さい頃から鼓膜切開術という鼓膜を切って鼓膜内外の気圧差をなくす簡単な手術を何度もしてきました。しかし、私にその手術の効果があるのは三日あるかないかでした。そのため、私の病気を根本から治すには鼓膜喚起チューブ留置術という入院と全身麻酔が必要な大きな手術をしなくてははいけないとお医者さんから言われていました。

私の母は、まだ小さい私に手術を受けさせることが可哀そうだと思い、何度も病院を探しては変え、私を手術なしで治すことはできないかとお願ひしてくれていました。しかし、そんなことをしてくれているとは知らず、私は「お母さんのせいで中耳炎になっちゃったんだ。お母さんの悪いところだけが遺伝されちゃったんだよ。」

と、母に言ってしまったことがありました。母も昔中耳炎であり、私の中耳炎は母からの遺伝だったのです。母は私からの言葉を聞いて怒ることはなく、ただただ「そうだよね。ごめんね。」と言っていました。中耳炎だったころの私は週に三回病院に通い、友達と遊ぶことはできず、習いたかったスイミングもこの病気のせいで習えませんでした。もちろん、学校の水泳の授業も受けることはできませんでした。「なんで私がこんなに辛い目にあわなきゃいけないの。」と何度思ったことでしょう。

正直、私は中耳炎を治すということを諦めていました。どうせずっと耳は聞こえないままだし、どうせ耳は痛いままなんだから。本気でそう思っていました。しかし、母は絶対諦めませんでした。忙しい時間のなか、自分の時間を削ってまで私の弱音を聞いてくれ、励まし、いつでも私の味方でした。私はそんな母の姿を見て、私も戦わなければいけないと気づきました。それから、病院に行く度に毎回薬を変えられていきました。どんな薬を出されてもしっかり飲むということを決めたからです。少ない量の薬から始まり、最終的には直径一センチメートルほどの錠剤を一日に十八錠も飲みました。私はそれまで粉薬しか飲んだことがなく、何度も吐きそうになりながら飲んでいました。

そうして三歳から小学二年生までの約五年間という長い戦いでしたが、私たちは中耳炎を手術なしで治すことができました。楽と感じたことは一度もありませんが、この経験から学べたことはたくさんありました。

今、普通に会話を交わすことができるのも、音の楽しさや美しさに気づき、音楽が好きになれたのも全て母のおかげです。照れくさくて母にちゃんと伝えられたことはありませんが、お母さん、本当に酷いことを言ってしまうてごめんなさい。いつも味方でいてくれてありがとう。

感謝と謝罪を伝えることは当たり前と言われますが、とても難しいことだと私は思います。それでも、「ありがとう」と「ごめん」を言える人は素敵です。言葉一つ一つには大きな力があり、その言葉だけで人を幸せにすることもあれば、もちろん人を傷つけることだってあります。その中でも「ありがとう」と「ごめん」は人を幸せにする言葉だと私は自信を持って言えます。

あなたは感謝と謝罪を誰に伝えたいですか。あなたを支えてくれている人は必ずいます。私は母に伝えたい。